

紹介

ムーア著「伊太利の第四の海岸」

リビアに於ける伊太利の大量植民

Fourth Shore. Italy's Mass Colonization of

Libya. by Martin Moore. 1940. London George

Routledge & Sons Ltd. pp.233

一、リビヤ植民の動機

歐洲に於ける人口過剩國と定評のある伊太利、大戦前移民の送金に依つてその國民經濟及財政を立直したと稱せらるゝ伊太利、大戦前年に六十萬の移民を送つた伊太利が(註一)、大戦後米國の移民制限を受け、どうするかと見ると、ムツソリーニは、却つて之に反動的に、當方より移民などは送らないと云ひ出して、移民出稼を制限すると共に、後には從來の出稼移民の歸國を勧告した。加之、「生めよ殖えよ」と人口増加政策を講じ出した。元來富源の乏しい伊太利である。海外移民を廢め、國內人口を増加して、何れにその食料と職業とを見出すかと見ると、ムツソリーニは、(一)國內の荒地の開墾に依つて耕地の増加を計り、(二)國外に植民地の開拓を計り、

(三)更に侵略主義に依る領土の擴張を計つた。その中第二の植民政策の中で最も組織的大規模なのが今本書に述べんとするリビヤの植民である。

本書の著者ムーア氏は英國のデーリー・テレグラフの記者で、伊太利に於て移民の募集、訓練、ムツソリーニの激勵振りを見、移民と共にリビヤに渡つて、彼の地に於ける植民地開發の狀況を具に實地に視察して、その見聞を基礎にして書いたもの即ち本書である。固より英國人らしい常識論よりする批評はあるが、政治的批評は努めて之を避け、極めて公平、客觀的記述に終始せんと努めて居る。

著者は先づ冒頭に於て伊太利をしてリビヤの計畫的集約的植民政策を實行するに至らしめた理由として、左の三個の事情を擧げて居る。

第一、過剩人口に對する出口を求めんとしたること、その必要は本文冒頭に述べた。

第二、各國の關稅政策に圍まれて伊太利も自給自足政策を採るべく餘儀なくされたが本國限りで自足經濟は絶對不可能である。そこで會てローマの穀倉と稱せられたリビヤに着眼した。古代ローマの繁榮を回復する事を以つて理想とするファシスト政府として正に當然である。

第三に、戰略的意義を見逸す譯に行かぬ。西、佛國のチュニスと、東、英國のエジプトとに挟まれたリビヤは、國防上相當の兵を駐兵するの必要がある。而して駐兵費を廉くする方法は植民である。現在の計畫は五年間に十萬人を送るにあるが、十萬人の植民は四萬の豫備兵を意味する。(二二一—二四頁)。

斯くの如き植民の目的を理解するに非ざれば、この大規模な費用のかゝる植民を合理的に理解出来ない。舊來の英國の植民政策を伊太利のそれと比較するならば、それは根本的に異なる。前者の個人本位なるに反して、後

者は家族單位である。前者が自然に水の低きに就く如く自動的なる人の流れに俟つたに反し、後者は悉く國家の保護と干涉の結晶である。それは長く國家財政に多大の負擔である。

伊太利のリビヤ移民が如何に手厚い、そして行届いた保護と干涉との産物であるかを描出すのが本書の主たる内容である。

註 伊太利に於ける移出民の統計は統計方法に差異ある爲か出所に依り區々なるも左に國際労働局の統計に依り戦前及戦後の移出民統計を掲ぐ(單位千人)

	海 外	歐洲大陸	計
1876—1900 平均			210
1901—1913 平均			627
1914—1918 平均			168
1 9 1			253
1 9 2	211	154	365
1 9 2	199	88	287
1 9 2	129	170	299
1 9 2	186	230	416
1 9 2	138	271	408
1 9 2	114	178	292
1 9 2	129	141	270
1 9 2	149	78	238
1 9 2	71	79	150
1 9 2	62	88	150
1 9 3	59	221	280
1 9 3	41	125	166
1 9 3	25	59	84
1 9 3	22	61	83
1 9 3	26	42	68
1 9 3	27	31	58
1 9 3	20	22	42
1 9 3	30	29	59

二、移民計畫、移民の選擇條件

そこで先づこの植民が如何に計畫され、移民が如何にして選擇されたかを見るに、後述すべきリビヤ總督バルボ Balbo が龐大なるリビヤの植民計畫を樹立して、ムツソリーニの裁可を得たのは一九三八年三月で、その年十月には、既に耕地が區劃せられ、家が建てられ、或程度の耕作準備の出來た所へ、千八百の家族、二萬人の移民が、十六隻の船に分乗してゼノ

ムーア著「伊太利の第四の海岸、リビヤに於ける伊太利の大量植民」

ア及ネーブルスを出帆したのである。即ち三月より十月迄七箇月の間に國內では移民の大規模なる募集が行はれ、その中より千八百の家族が選擇され、一方リビヤでは集約的な労働に依つて家が建てられ耕地が準備された。(一九頁)

此處で吾々に最も興味のあるのは移民の選擇であるが、政府は次の三箇の條件を標準とした。(一九—二二頁)

一、大家族なること。家族數八人以上、一家の中労働に従事し得るもの五人以上なることが要件とされた。之千八百家族で二萬人となつた所以である。

二、健康なること、殊に結核、トラホームなきこと。

三、思想鞏固なるファシストなること。

四、必要要件ではないが、凡ての移民家族に共通なことは「貧困農民」と云ふ事であつた。熱帯の苦しい労働を覺悟して新地に行くものは何れも土地所有に對する憧れに燃えた貧農であつた。移民は都市の失業者中よりは全然求められなかつた。

移民の募集に應じたりしもの六千家族、その中より三分の一以下の千八百家族を選ぶので、選擇は容易であつたと云ふ。

移民の選ばれる状況や、船出の状況、上陸の状況を著者は實地に見た眼で新聞記者的な筆で詳しく書いて居るが、本小文にはそれは割愛しよう。一言に要約すれば、それは壯んな國家的事業として喜び勇んで行く團體的行動である。彈丸のやつて來ない出征兵士の門出は斯くやと想像される。

(三一—五三)

三、植民機關及政府の保護と統制

リビヤの土地に關する詳細な記述も省かう。要するに此處はギリシヤの

植民も、ローマ人の子孫も跡片も無く消えて、今は不毛の砂漠にも似たる所である。これがどうしてローマ時代の穀倉であつたかと疑はれる。(五四―七一頁)

今吾々にとつて最も興味のあることは、植民地の制度と國家施設である。リビヤの植民は人口的 *Demographic* 植民と呼ばれて居る。それはなるべく多數の伊太利人を引き寄せて、之をその土地に定着せしめるにある。會てリビヤの植民政策も他と同様大きな租借地を與へて私人の開發を促した事があつた。然しかゝる制度の下に來るのは資本家であつて、資本家は土人を使用して耕作せしめる。國家は財政的負擔なくして土地の開發を計ることを得るけれども、それでは伊太利人の定着にはならない。(七二―七五頁) 次に小租借地を與へて、自作移民の入植を歓迎し、又大農の場合には伊太利人の一定數の使用を條件としたこともある。然し何れも成功しなかつた。移民はその農園が収益を擧ぐる迄支持する力がなかつたのである。固より伊太利政府は相當の補助金を與へたけれども充分ではなかつた。

新總督航空將軍バルボのリビヤ總督となつて後一九三七年最初の國勢調査に依ると移民に分配せられた土地は三十萬エーカーに増加したけれども開發せられた土地は二十萬エーカー以下であつた。それよりも重要なことは其の開發した土地に働くイタリア人の農民は僅かに千二百九十九人で、しかも其の大部分は土地を有しない單なる被傭労働者であつた。農場の數は八百四十であつて其の中に十二ばかりの植民會社があつた。其の植民會社の中に *Fante di Colonizzazione per la Cirenaica* (以下エンテと略稱す) 及社會保險協會(以下協會と略稱す)の二大植民機關があつた。エンテは十四萬七千エーカーを有する最大の植民機關で、特に小農移住の目的を以て設

立せられたものであつた。保險協會は元來社會保險の團體で何等土地開拓と關係ないものであつたが、バルボ總督がエンテ同様植民の仕事に託したのである。此の二つの團體が新しいリビヤ植民の中心機關となつた。

植民の方法は大規模の土地開墾と小規模の耕作とを結合したものであつて、且開墾の準備に必要な一切の設備は、政府が負擔するところに重要な特質がある。先づ第一に政府は土民に賠償金を拂つて耕作に適當な土地を收用し、道路、井戸(地下水の利用は本植民の生命である)水道幹線等を作り教會市民會館ファシスト本部其の他の公共建築物を建て、之を總べて無償でエンテ又は保險協會に引渡す。もとより必要な監督と補助とは其の後も繼續する。其の後はエンテの負擔ではあるが政府は其の費用の三十パーセントの補助をする。エンテ及び協會は各戸の農家の家屋を建て、之に水を給し、家具納屋をそなへ、土地を耕作に適する様にし其の上に種子まで支給する。かゝる準備の成りしところに移民が來て耕作に従事するのである。(七三―八七)

伊太利のリビヤ植民に於て最も著しき特質は政府の保護の厚い事である。

第一回集團移民二萬人を送るべく諸般の準備に政府は百十萬磅(百リラを一磅として計算せるもの如し)を支出した。(その中二十萬磅は土地を土人より買収するに要したりし費用及幹線水路費で將來の移民にも役立つ)、(九四頁)之に對しては移民は全然費用を償還するを要しない。その後の費用は植民機關の支出にかゝるのであるが、上記二機關は二萬人の移民のために三百萬磅を支出した。一農場當りの費用は一、八五〇磅乃至一、三五〇磅で平均大體千五百磅である。その中三〇%は政府の補助なるを以つて移民の負擔は一、二九五乃至九四五磅である(一三八頁)。リビヤの如

き土地貧弱で、水の少い農場が、是丈の債務を償還する事は容易でない。その上に政府は保護の代償として耕作に關し重要な制限を附する。作物は自給自足に必要なもの、又は伊太利が外國より輸入するものでなければならぬ。かゝる條件に合したものは穀物とオリブである。斯くて何れの農場も穀物とオリブとを主作物とする(一〇〇頁)。この事が移民の經濟状態を困難にし、債務の償還を困難とする。穀物は價格としては極めて廉く、オリブは盛んに實を結ぶには十五年を要する(二二二頁)。そこで移民に對する一層の保護が必要となる。

四、入植より地主となるまで

移民は先づ最初の年は何等の収入なきを以つて植民機關の賃銀労働者として働く、その賃銀は月平均六磅十志である(一三四頁)。十人を超ゆる大家族に對する生活費としては決して充分ではない。然しそれは全く移民への補助であつて、それに依つて植民機關は何等得る所なく、固より償還をも受けない。この賃銀労働の關係は更に一年延長される事があり得る。

次に五年間は移民は分益小作人として働くが、出來た作物は半分を植民機關に提供し、之に對して現金又は種々その他の實物を受ける。而して受くる所は提供したる作物の代價を遙に超えると云ふ(一三六頁)。

その次に第三期として愈々獨立の農業主となり、土地は擔保として、農場に要したる費用(内三〇%)は政府の補助なるを以つて償還を要するは七〇%なること上述の如し)の元利を年賦を以つて償還するのであるが、その利子は年二分に制限せられる。固より植民機關は三分半乃至四分の金利を支拂ふを要するを以つて、その差は政府の補助である。(二四一頁)獨立農民となつて約三年間は元金を支拂はず利子(二分)のみを支拂ふ。四年目より元金の年賦を支拂ふのであるが、それが二十七年と云ふ長期年賦を許

される。(二四一頁)斯くて入植より、債務の完済迄三十六年の長期を要し、その間受くる國の補助を計算して見ると、

- 1 全然政府負擔の準備費、一家族當り五百磅
- 2 植民機關の支出する農場建設費の三〇%の補助、一家族當り約四百五十磅
- 3 最初一年間(又は二年間)の賃銀七五磅乃至百磅(二二八頁)
- 4 農場建設費の七〇%に對する利子の補給(二%を超ゆる部分)
- 5 分益小作時代の補助

是等を通計して國家は一戸當り幾何の補助を要するか著者は計算して居ない。本書に於ては償還の問題を無視して植民の費用を一戸當り約二千磅と計算して居る。(二二〇及二三四頁)

五、本計畫の眞意義

財政上より見、個人的希望より見るならばもつと國の負擔を輕減し、個人の収益を上げる方法はあると云ふ。リビヤに於て最も金錢的収益をあげ得る作物は煙草なる事は何人も知つて居る(一四六頁)。又何が一番欲しいかと移民にきけば彼等は葡萄酒と答へると云ふ(一四七頁)。然し政府は國策的見地より穀物とオリブを植えしめるのである。尙經費の節減を計るならば灌漑することなく乾燥耕作をなすに如くはない。リビヤの經驗に依れば耕地準備費は、乾燥耕作の場合には一エーカー當り六磅乃至八磅にて足るに反し、灌漑耕作には一エーカー當り二十四磅乃至三十二磅を要すると云ふ(二二六頁)。それにも拘らず、灌漑耕作をなす所以はなるべく多數の人々を移植せんとする「人口植民の爲である」と云ふ(二二四頁)。

以上の如き國の補助の外に尙國が全リビヤを横斷する道路に投じた費用を數へなければならぬ。チュニスよりエジプト迄千百三十二哩に及ぶ新

式道路は眞にリビヤの生命線である(一九五頁)、それは大規模工事と土人の勞賃の廉なる爲に、一キロ一十磅であつたと云ふ(二〇一頁)。然し伊太利政府は云ふ「リビヤの道路は少しも餘計な費用を要してゐない。それは駐兵費の節約に依つて優に償はれた」と、同様に一戸當り二千磅の植民も之を駐兵費と考へる事に依りて頗る經濟的と考へる事が出来る。第一回は四百萬磅(將來の役に立つものを差引き)で人口二萬人を植民したのであるが、五箇年繼續すれば人口十萬の植民に對し、二千萬磅を要する譯で、植民としては誠に世界中他に比類なき高價なものであるが、十萬の植民は四萬人の豫備兵を意味し(二二〇頁)、リビヤの駐兵費又は伊太利よりの派遣費と考へればかゝる莫大なる植民費も成程と首肯される(二二二—二二三頁)。

六、總督バルボ

リビヤ植民を語るに際してはその總督バルボ(Balbo)に就て一言語らざるを得ない。バルボは航空次官として伊太利の空軍を作り上げ、一九二九年航空大臣に任ぜられ、一九三一年には歐洲より南米ブラジルへの無着陸長途飛行が成功し、一九三三年にはシカゴの博覽會に百臺の飛行機を連ねて集團大飛行をやつて盛名を擧げた。一九三四年辭表を提出して受付けられ、リビヤ總督に任命せらるゝや世人は何の意たるやを解せず種々の噂を生んだのであつた(二六一頁)。然しこの暫くも停滯することなき活動家はリビヤに於ても彼に非ざれば出來ない事を企て、之を爲した。殊に驚くべきは彼の仕事の解放振りで、航空大臣時代も大臣室はガラス張りにし、晝は士官も兵卒も大食堂で同じ獻立の食事をとつたのであるが(二六三頁)、リビヤに於ても彼の解放的積極的な性格と生活とは、伊太利人は固よりアラビヤ人の間にすばらしき人氣を博した。アラビヤ人は彼を「鳥人の父」と呼

ぶ。常に飛行機で各地を訪問するからである。大衆の集團に際しては「ドゥーチェ」(Duce)と云ふ叫び聲と「バルボ」と云ふ叫び聲とは相和する。彼は總督の上にリビヤに於ける陸、空、海の三軍を統率する最高總督に任ぜられた(二六三頁)。その行蹟に於てその性格に於てファシスト黨内ムツツリーニ次ぐこの人氣者がこの次に何をなすかは全世界の刮目して見る所であつたが、今次の大戦勃發後死去した様である。(北岡壽逸)

佛國革命議會に提案せられたる人口増加案

佛國革命時代も人口増加策が主張せられ、流石に傳統を脱した時代丈に随分突飛な提案が爲された。奢侈、獨身、僕婢等に對する重稅案、勤儉令案、子のある者と獨身者とは異なる衣服を着用せしむべしとの案、父には名譽と金錢的利益を興ふべしとの案、兵士にも結婚せしむべしとの案等を、更に革命第四年には獨身を死刑を以つて禁すべしとの請願が提せられ、第六年には一夫多妻を主張するものすらあつた。又獨身は一般に非難され獨身者には公職に就くことを禁じ、輕蔑さるゝ如き衣服を着用せしむべしとの意見さえ發表された。

(Spengler, France faces Depopulation より 北岡)